

日本と外国産イリス属植物の競演—明治から戦前まで

横浜市 椎野 昌宏

イリス属の分類と分布

イリス属植物は北半球の亜熱帯から亜寒帯に分布し、ヒマラヤ山脈の高山地帯から中近東の低地乾燥地帯にまで自生しています。原種数は分類学者によって異なりますが、約200から250種とされています。私たちにとってもっとも親しみのある花菖蒲とジャーマンアイリスはいずれも根茎を有するイリス亜属に属し、更に花菖蒲はスパトゥラ節のアポゴン亜節、ジャーマンアイリスはイリス節のエウポゴン亜節に細分されています。スパトゥラ節はピアドレスアイリスともいわれ、外花被にヒゲ状の突起をもたないものがはいる、イリス節はピアデッドアイリスともいわれ、外花被にヒゲ状の突起をもつものがはいます。つまり花菖蒲、アヤメ、カキツバタなどの日本産アイリスはヒゲ状突起をもたないピアドレスアイリスであり、ジャーマンアイリスなどの洋種系アイリスはヒゲ状突起をもつピアデッドアイリスです。同じ亜属にはアイリス亜属以外に少数派の3つの亜属がありますが、いずれも球根または塊根をもち、ダッチアイリスはそのうちのひとつクシフィウム亜属に属します。

本稿ではまず日本と欧米を代表する花菖蒲とジャーマンアイリスの園芸グループの成立過程について触れ、あとイリス属全般につき記述します。

江戸園芸文化を体現した花菖蒲

その1 ノハナショウブから花菖蒲へ—松平菖翁の功績

花菖蒲は日本に自生するノハナショウブ (*Iris ensata*) から作られました。日本のほかシベリア、中国東北部、朝鮮半島にも生育していますが、学名の *ensata* は剣のようなという意で、葉が

鋭いことを形容しています。日本では北海道から九州まで分布し、山地や海岸の草原や、河川や沼の水辺などに生育しています。花菖蒲は江戸前期から作られていたようですが、江戸後期に旗本の松平左金吾定朝が花菖蒲の改良育種を本格的に手がけ、多様な品種群を発表したことにより、江戸園芸を代表する花となりました。1853年に『花菖蒲培養録』が出版され、銘花撰には作出した120品種があげられています。そのなかには現在でも花菖蒲愛好家が栽培している、宇宙 (おおぞら)、鶴の毛衣、仙女の洞、霓裳雨衣などがあります。花菖蒲に一生を捧げたということで、自身菖翁と称していました。その2 欧米に輸出され、植物貿易の先駆けとなる

松平菖翁などの作出した花菖蒲が江戸系として栽培され、明治、大正時代にかけて、東京葛飾の掘切地区には最盛期には6つの花菖蒲園が集約した一大行楽ゾーンとなりました。また江戸末期に熊本に渡って改良されて肥後系の花菖蒲が生まれ、松坂では独自の伊勢系の花菖蒲が生まれました。明治22年 (1889) に植物貿易を目的に設立された横浜植木株式会社は、逸早く明治25年 (1882) に日本植物の英文カタログを出し、そのなかで *Iris kaempferi* の名前で花菖蒲24種を掲載しています。(注：花菖蒲の原種ノハナショウブは後に *Iris ensata* に変わった) その後同社は横浜市磯子に自社経営の花菖蒲園を造ったり (のち東京蒲田に移転)、米国ニューヨーク支店を設けて輸出をはかったりして、花菖蒲を海外に広めました。また欧州では、シーボルトのライデン気候順化園などから苗を入手したヴィーチ商会が花菖蒲を販売し、花菖蒲の知名度を高めました。

西欧の園芸文化を描出したジャーマンアイリス

その1 ヨーロッパ各地のアイリスを交配

ジャーマンアイリスは長い年月をかけて各地の野生のアイリス属原種をかけあわせて人工的に作りあげられた合成植物で、花菖蒲が単一の

日本産ノハナショウブから出来上がった純血植物とは生成経緯が異なります。本稿はその複雑な過程を記述するのは主旨でないので省略しますが、野生種から園芸種へ改良されたのは19世紀中葉で、英国人や、フランス人によって盛んに行われました。然しヨーロッパの野生種は2倍体の中輪であり、丈は低く、花色の変化が少なく、やや貧弱なものでした。1900年になり、英国のマイケル・フォスター卿が(1836-1907)トゥロヤーナ (*Iris troyana*小アジア)、キュプリアーナ (*Iris cypriana*キプロス島)、メソポタミカ (*Iris mesopotanica*トルコ南部) など4倍体の野生種との交配を進めた結果、大輪で高性、かつ分枝性のある、現代品種の直接の親となった品種群を生み出しました。

その2 W.R.ダイクスなどにより西欧を代表する花となる

フォスター卿の育種方向をさらに発展させたのがウィリアム・ダイクス(1877-1925)でロンドン郊外の自分の庭園にたくさんの収集した原種を植え、組織的に分類、調査、分析し1914年に「アイリスの原種」という古典的な文献を出版しました。彼の作品の中でもっとも有名なのは綺麗な青色地に黄金色のヒゲを引き立たせたゴールド・クレスト (*Iris Gold Crest*) と、1925年に交通事故で不慮の死をとげたあと、残された膨大な育種コレクションのなかから選抜されW・R・ダイクス (*Iris W・R・Dykes*) と命名された黄色いアイリスで、現在でも高く評価されています。

ダイクスは1925年、交通事故で48才の若さで亡くなりましたが、そのアイリス属の研究やジャーマンアイリスの育種の功績と名誉を称え、1927年から英国アイリス協会では年度の最優秀育種作品に対しダイクス賞 (Dykes Medal) を授与することになりました。米国のダイクス賞、オーストラリアのダイクス賞も設けられ、この賞を受賞した作品はジャーマンアイリスの世界的優秀品種として人気を博しています。

このように園芸世界の対極にあると思われる日本と英国で、花菖蒲とジャーマンアイリスと

いう同じアイリス仲間でありながら、異質の花が熱心に改良され、観賞されていたという背景を考えながら、本稿の主題を追ってみます。

明治以前に渡来した外国産アイリス

外国産アイリス属植物の最も古い記録は、延徳3年(1491)シャガが宮中での立花に、明応1年(1492)にネジアヤメが宮中での立花に用いられたと山科家礼記にあります。立花とは花を立てる、花を活けるか、植えるかして観賞したという意だと思います。シャガ (*I. japonica*) は中国原産で、古くから日本に渡来し、帰化植物となりました。外弁には黄色や青紫の斑点と中央にトサカ状の小突起があり、内弁は淡い紫がかかった白色で、両花弁とも縁は縮れて微裂します。ネジアヤメ (*I. lacteal*) は、中国から中央アジア、アフガニスタン、パキスタンにかけて広範囲に分布しています。葉が振れて立つことからネジアヤメといわれ、淡い青、青紫、紫色の花をつけます。

次いで明応9年(1500)にイチハツ(一八)が文明本節用集に収録されています。イチハツ (*I. tectorum*) は中国南西地域やミャンマー北部に分布しています。花色は淡青紫で、まれに白色もあります。下弁にはトサカ状の突起があります。学名のテクトラムは「屋根の」という意味で、明治初期横浜付近の茅葺き屋根の棟に生えているのを外国人がみて名づけられました

寛延元年(1748)にキンカキツバタ (*I. minutoaurea*) が東莠南畝識に画かれています。朝鮮、中国遼寧省産で、草丈低く小型ですが、名前があらわす鮮やかな金色で水平咲きの花をつけます。安永9年(1780)には聚芳図説にカマヤマショウブ(釜山菖蒲 *I. kamayama*) の名前が載っています。朝鮮半島、中国東部に濃い紫色で、茎が長く伸び、アヤメに似ています。さらに慶応3年(1867)にパリ万国博覧会に出席した我国博物学の草分けといわれる田中芳男が持ち帰ったといわれるニオイアイリスがあります。これはアイリス・ゲルマニカ・フロレンティナ (*Iris 'Florentina'*) のことで、内弁

は白色で立ち、外弁は紫色で垂れ下がり基部に濃い黄色のヒゲが入ります。幕末の本草学者の安倍喜任が田中芳男からその生根を贈られ、番町九段坂と駒場の御薬園に移植して栽培し、4月に開花させ、さらに増殖をはかりました。彼はこの植物をその記録のなかで‘ヨシオイリス・アペイチハツ’と名づけました。春開花が早いことから一般にはイチハツの名前が混用され普及しましたが、真正のイチハツにはヒゲはなく、前述のようにトサカ状の突起が入り異なります。根茎を乾かすと芳香を放ち、ヨーロッパでは古来薬用として用いられましたので、ニオイイリスともいわれました。

(注：以上の渡来記録については磯野直秀氏の優れた考証「明治前園芸植物渡来年表」(2007)に準拠させていただきました。)

明治以降、導入され、広まった外国産アイリス その1 帰化植物となったアイリス

前項で紹介した、シャガとイチハツは日本国内で農民中心に普及し、あたかも帰化植物のような存在となりました。もうひとつ明治時代の中頃に渡来したといわれるキショウブ (*I.pseudacorus*—英名Yellow flag flower) も、日本の風土に順化し、繁殖力も強く、各地に野生状態で群生し帰化植物と見られています。ヨーロッパから西アジアの原産で、草丈が75-160cmくらいまで伸びます。湖、池、小川などの水辺を好み、5月から7月にかけて径10cm前後のきれいな黄色の花をつけます。上弁は小型で、下弁には褐色、青紫の筋がはいります。

その2 横浜植木株式会社カタログおよび図譜より

明治42年、43/44年カタログと大正年間発行の図譜に現れた洋種アイリス類を列記しますが、筆者の予想したよりはあまり種類が多くありません。

* ジャーマンアイリスの園芸種 (アイリス亜属)

図譜にあるフロレンティーナ2種 (*Iris Germanica* var. *Florentina* Blueと *Iris Germanica* var. *Florentina* White) は前述の田

中芳男が導入したものではなく他のフロレンティーナ4種とともに、ゲルマニカグループの園芸種だと考えます。また販売カタログにジャーマニカ混合 (Germanica Mixed) と示されているものも図譜と同様に、当時欧米で改良が急速にすすんだ色彩と模様豊かな、今日の呼称で言うジャーマンアイリスの初期の段階のもの (2倍体) ではないかと思いません。プミラ (*I.pumila*) は旧ユーゴスラビア、欧州東部、ウラル山脈以西のロシアに分布しているピアデッドアイリスです。丈は低いが5cm径くらいの紫、青紫、黄、白色の花を咲かせます。のちにゲルマニカグループと交配されて、丈の低い矮性種 (Dwarf Bearded) を生みました。南京アヤメの名前で売られたものは他との交雑種です。

* 喪服のアイリス—スシアナ (アイリス亜属)

スシアナ (*I.susiana*) はオンコキュクルスの仲間ピアデッドアイリスです。1573年頃コンスタンチノーブルからヨーロッパにもたらされたという有名な古典的種類です。草丈は35cm前後で、花は大きくて丸く黒ずんで見えることから‘喪服のアイリス’と唱えられました。トルコ産といわれていますが、現在その自生地は見つからず、始祖の同じクローンを受け継いで長い間栽培されてきたといわれます。このような不吉な色調をもつ妖艶でミステリアスなアイリスを当時カタログにのせていたことに感心します。

* 球根系アイリス (クシフィウム亜属)

ヒスパニカ (*Iris Hispanica*) という名で紹介されたのはスパニッシュアイリスのことで、地中海沿岸地域に広く分布する原種のクシフィウム (*I.xiphium*) から選抜され育種されました。堅い皮膜をもった丈夫な球根から径7-10cmの切り花向けの花を開きます。草丈60cmで白、黄、青、青紫、赤紫と色彩が豊富です。

アングリカ (*Iris Anglica*) はイングリッシュアイリスのことでピレネー山地に自生する原種から育種されました。丸弁の大輪で濃紫、

青、藤、白色の花をつけ、切り花に適します。

ダッチアイリス (Iris Dutch) はスパニッシュアイリス系やモロッコに産するティンギタナ (*I. tingitana*) などと交配させてオランダで改良された品種群で、白、黄、青色と豊富で、アイリス系切り花の代表格です。

若干異なった球根系アイリスとしてレティクラタ (*I. reticulata*) も紹介されています。レティクラタとは‘網目のある’を意味し、球根が網目上の外皮で覆われています。中近東やコーカサスの標高600-2700mの山岳地帯に分布しています。丈低く、径5cm前後の青から紅紫色の花をつけます。下弁には黄色のクレストをつけます。

*ペルシカ (スコルピリス亞属)

ペルシカ (*I. persica*) は球根・塊茎アイリスで、トルコ、シリア、リビアに分布します。丈15cm位の小型種で、2月頃銀灰色から黄砂色の濃い色調の径10cm位の花を1-2花つけます。

その3 外国産アイリスの2つの流れ—趣味家向けと流通市場向け

趣味家向けアイリスとして現代ではジャーマンアイリスがトップに君臨しています。明治から戦前の時期は、欧米では前述のようにダイクスなど先駆者たちが品種改良成果をあげ、栽培熱が盛り上がった創生期でした。日本へはゲルマニカの名前で輸入されましたが、あまり目立った存在ではありませんでした。ジャーマンアイリスの改良が高度化し、華麗な舞台を見せるようになったのは戦後で、その発進先はヨーロッパから米国に移っていました。高温多湿な日本の夏の気候と酸性土壌に合わないことがネックでしたが、適応する品種群もあらわれ、現代ではガーデンアイリスとして広く栽培されています。また前述のように異様な姿をした稀種スシアナもすでに趣味家の間で知られていました。

一方、切り花としては、横浜近郊の植木職や農家が菊、ユリ、カーネーション、ダリアな

どに加え、イングリッシュ・アイリスやスパニッシュ・アイリスなども明治28年(1895)頃から栽培し販売し始めたようです。現代ではアイリス系切り花としてはダッチ・アイリスが主流となっており、秋植え球根としてはレティクラタやペルシカを含むユノーアイリスも園芸店から売られているのを見ます。外国産アイリスの園芸市場は戦前から小規模ながら形成されました。

美意識の差—花菖蒲とジャーマンアイリス

古代ギリシャ人が地上とオリンポスの神を結ぶ架け橋‘虹の花’として称えたアイリスの究極の姿といってもよいジャーマンアイリスと、日本の武士が尊ぶ‘尚武’の精神の具現された理想像といってもよい花菖蒲を、美的観点から比較してみましょう。

先ず花型をみるとジャーマンアイリスは上弁が花弁の上にすっと立ち上がり、そのプロポーションが躍動的で量感があります。一方花菖蒲の上弁は小さく躍動感はないが、下弁と一体となった六弁花、さらに八重咲きを生み出しました。花色と配色は、ジャーマンアイリスはパイトーンで上弁下弁の色調が異なるタイプ、パイカラーで上弁下弁の色彩が異なるタイプなどを作り出し、花菖蒲は花色の幅は少ないが、グラデーションの演出、ぼかし、吹き掛け斑点の描出などにより微妙な変化を加えました。また生態からすると花菖蒲は水辺の湿地を好み他の植物との混生に向かない気位の高い花であるのに対し、ジャーマンアイリスは普通の土地で他の植物との共生に耐える奔放自在なガーデンプランツです。総体的にみてジャーマンアイリスは近代西洋絵画的で、花菖蒲は日本画的であると言えます。

本稿が対象とする時代には、外国産アイリスはイチハツ、シャガのように帰化植物化したものの、ダッチアイリスのように流通園芸化したものの、ジャーマンアイリスのように高度な趣味園芸の萌芽段階であったものに3分されるようです。